千句前集　一

一晶撰

新宮城書

へ 5
2247

へ利5
2247

南葵文庫(?)図書

千句前集

一時之所是未必是蓋一時之所是者是其所是而非我輩之所謂是也一時之所非未必非蓋一時之所非者非其所非而非我輩之所謂非云云

燕石丘當時則得草匱十重之尊重和砕土丘當時則逢再則之毀辱豈燕石可害和璧可罪乎不知者顛倒錯乱而已

自警言七是

句をかきんとすれハかならす此料紙を

明治四十一年五月十四日
冨山房紀念氏寄贈

さしく聰ふ足しされ類

唯　娟醜浴のまゝなしんと是

自身力あらんと思ふへ必牛にるの騰驤罵怒せ

ひとし

唯　猩ふしく勇悍なるん哉是

自をゑへ妬ましんと思ふれへ為し次　所を担さそ

笑を求むるふちらし

唯　箕踞祖裼なしたしく花

なる哉是

去自ふすてゝもらく強なしんと思ふれへ弐衣

哉禄する膠漆を補する

喻へへ襟裾へ別ぶしく絲乃まなさ

ろを是

おりをまゐれんすまへ式へ襪哉不従しなめ

踵を探ら身似たるを

喻へハ大指ひとしうたしくこゝろもお親

なし哉是

破きへ維をうひ泥めは変化をとなしく絵やまも

らうかはを好めハ淡し約しきを求れハ矣
拙からまをしむことのハ多癖屈するものハ殺し

其是なしんとなまて是是

人性の稟るところ好むところの気をうしなひて鬼神
は佞し門を壊さし淫妓楽は不好しく節女
は衣をとらしまて白居易は章句の癖あり
杜預小九傳乃癖ありて王済馬まん癖あり
樊光は乃癖あり彼ありこととなりて倦
てすまひ癖あれりのは不是

一晶

前車

麦芒や絶ことをもて紀淡施
あふさこを〜の白纸を〜省
居条の陸に〜て紙むとく
うはくしる櫚のし
陶まて孫ハ蘂切わとく
珠吹かみ日乃未れ鈴舟
礼みて小の布子麻を海
荒のつあられ縫のあるひ

ウ
古楽ハりふましまとるのなんとしく

寺の嫁とくそのひてんこさ
こひたる紙芝国のゐきてゆひ
鯖狗けぶふるや　果ねる
みそれどの原元とかゐ海の夜にと
龍宮のほうり渡橋の　こゝし
しいらくよう霊夜法乃杖
ちいおう傍ん仲哲れ安徳
日の罪をはらふるゝや教明海
未摘わだふ金臨る　自
謡角をあるとし海ハきは堂
男ハ握しる　女子　貞

かれらにおそれよの花の夜
ゆうなしされ墨も匠ろさ
ふみくとあまるのみのときで
法師達の詠るうかしき
日乃む〆新羅の人のかゑつき
家から人をみ高乃みち
丸し紙名を給ひ仮名やんわく
詠部ト弥とつる　初子
光石紙世能の宿れめぐしうふ
おやさすはの町乃ちし気き
労れ苦しれみしつる　加生

花ぞのふれ　首乃對面
二人妻ひとはんの　下これ
うきこはも合の袖をかさねど
十五日間乃哀あれハ自哀なり
草木乃秋を風乃　生死
費ハあれ水江乃堤汐こして
我身まうた花神の川合
絵の出ふあるえし　色狐
帽子こうしうる継母乃　白
ら前れそと逢乃手柄酔ハし
まりとなくてふ[illegible]の明家

暦見ぬ奥山里ときさらぎ
もものと酒匂の嵐乃え浪
原の見濃ら身の甲斐が峰ハ家
歎ら八乃時の　らは口
夕涼流乃極布う　横園
西と仏陀よ　月の門紀
霞渡乃世我永代ゝ名山けく
虎とうへうかけしぬれ　延
妖怪ゆくの乃とうなりかなもいと
まけるこえらなまとの皮と
あるとくさいの白粉こ[illegible][illegible]桂笛

美ましき若乃殿々の後ひとゝせ
惟然日明る里居の兄の寺ぬり
あへなき父人もなくけま
哀ひ給ひしことなるこの比愛
机にむかひ閑窓にこもり乃孫
たましふ法師すゝめて昭にて
絵にもかゝれし一翁乃仙
許すまじく居の上乃やまぶ
鞭入りし机のかゝりさうて
月をかたく床蔵収の秋の金巨燵
雪月花の和尚かん閑乃あら恒

勉力筆持つて見足の條剣
哭する遠く元禄乃卯
八月廿日庵主浩然の海邑ひ
果て都出で其庵合
樓上に庵を移して春の花を見
まてとうらしく毎乃たそかれ
よろづ記んとする事なる孫
親の日ことの念仏かゝれに
なりし年の古筆猶もて硯箱
庵陰しての様を見さらし
うき身よ安全乃らんさ物語

萩ちる女舟のうきしづみ　あり
古相撲ふの指乃　袮穢
公門代の添生婢の　不引
永楽の抽賣らけすくみや
船なり夕なの時宗　一国
借り武具乃胴の捷　さうよ
庭にて酒しこみけるを手母なる　蘂雉
南さし飛してそ仰さま　乱山
かゝるにもおくもすゆきわぐ人
さげ髪をはしこ飛ひきまて去年げ
此酒の飯まかなひのてうと三寸

余

初冬の乃ろ飛市の宵しまひ
時雨やらもの傘丸　文射
芝生小須くとみて迄盛れ
橋乃際まで流しのほる舟
縫うこる葬つさ舟られけて
かたりこともうもて肉つれち
東海の江尻乃町れひもろ酒
何を兆ここまする　酒うもて
徒くくと紙のあぐ絵描り取て
眠り乃くちを作候乃　上燕
灯りまあてて風乃中成　光之

汲

廓にて啼けは　立きて
通ひ来りけるものゝ如し須磨の夕をみて
紅梅しれてそれ日の庭

倭産業　一晶

漆かく業ともつかまへて風に添せ
蒔の室し蒔は浅る修ひか
植きて朱の欄に彫添して
今様にはかに書混せ
茶挽る風のそよく一とせ
気は味くあれ古の風つき

自ら母語て出ては文字
筑紫の国の寄や来備の墻
御ととはよ成は天に参りて
さかなき神よ　仏の洞伏
尾張の藤をと心経をと読みて乳けと
姿は丸の里のまたむ所にて
如月の空の揚をは月に寄りて
是もあまりて書写の法師
うけらさて田植の古とも孫となりて
あまあへはみの足出し　名利
かゝ久根よりも作法の流れたて

捨身乃巌あらはれのこし　陶
白雲を呑んで八里を吐く　嵐
昆布ちる海士のくしろ沈ム　呂
魂をとらるれ浜のみをほりて
念セい径乃木に入る　窓
二
涙うきし牢屋の窓のさし向ひ
ことばさふらふく　形白の朝
曽ノ咀は来る句をとりあへて
似乃士な御札冠せん　蓋ル
村縄の青丹小袖母紅のうら
あれや傍閨つんでよせるふけ

狂人の子は鶏るよあらし
燈火の色合秋の　信堂
多き坂の淀来れ町の姿と雅也
寂とよのかへるもいとてえ栄の茶
あらう其の角さそ啼る臭を指
南そを領れ松風きん　音
刈藻し獣れ床に月をてんく
自宅の和れが名やてる秋
非して人の胃掻く　石れ　問
伝ひ四村あまれ　沐乃滞　稜
網かかりて鰯は鴨れ布施かしく

丞かく第　亭乃擬むしろ
こよの中この哭得めく日八月涼し
若發つくる顔の　まゐさ子よ
朝陽をひ啓やまとあけの极楽の内
行して至乃修人もぬ来ぬ
隠奥秘辛頭海極とし千束に
まちらをきし稀しも立する　薩
世乃道母鏡をてゆれい　菩我秘矣
来ぬえしちまれ阿弥陀　大光
焼秘免女自郎縁の利は　亡八
契機海乃温泉の露る時

三
岩こ以て木葺まゐる　岩乃門
雲路乃かすん　章繁秘角ふし
鶴書秘代をは剣の池とまゐ里
魔鬼と切り目乃間秘　閑
數とを殺殺の法の罪　なそし流
きしされとの秘ちりくぞつる
生死ふ火乃と極火法乃桃えきま
里やこゑしの路乃　倫　爾来
伊豆山子修る日と安居し露し
雷山秘　法乃　極王
寺剣てつんをしい生毎まとり不の中

云ふ家ふ残ろム 屋佐らし山乃礼
西母陀よの神代まし満さき
これを玄る〻る舩のあやまち
猿緒ふ腥臊乃残る悟まゆき
なましとは見ふ志さむ盃
大国の蝦夷乃花見もえすは
てひまいらきし人男女あり
十兆雛十色の眉乃作り恒ろ
余の貝あまぬ 蛤れ 蓋
ひとつ原る條さ海ふ麻も粉で
為さしく風の淡きを 鶏口

吟ぎよの残あるとも藤もて深き鳥
妻后怨をりて宍舩し
浄瑠璃もかみきしゆるなく筆り
伏見立てくの治 五口
背梢を枕れとも乃菱むしろ
書の日なふ漕くる 舩
木村が三ッの孫姉ふはくる串く
瑞獺ほりよ 君が代乃 市
箱しぬをつれも祝ての 捲膾
こ〻様のよりも 辰あまし 猿
豊久乃中入らとハ 篇 家

念仏といふも罷もたゞならまで
世の栢を悩ませ奥足所矢の箱摺り
二三乃年の時れ　口論
葬礼の歌くらきを案不みしく
野里れ家に鯉　樵ノ　芋ヘ(カサ)
横枝さす自乃来りを足体
追剥衣は　分り　萩原
沢蟹(カワリミ)これハ女よ　秋さむし
うき流のるみて　ふれ　尸
稀なるさす古年の春田乃らなて
来るみちるしてれるれ宿

任連のうち陶焼(スヱモノ)が竈こちく
卯か(コ)へともこハ追ひてや　雑子
日蓮とは移りし弘れ法のな
きなさき人乃世ぬるもる　道
まとせや参差(カラミタカラ)れ流るひりの
籍をとこみ乎なうしけるる舟

愁秋色　一品

発句
渋乃ほる宿や日ハ酸に妹乃色
ワキ
秋まされ机み針試さ欲　風

三 末枯ても菊の莚を好しみて
四 纔に三日の入相の　月
五 鹿添ふ樹の卯花ん一ゝ作
六 夕稀しき小乃　梁
七 酒造る前はらうのいと酒さし　月定座
八 車挽く程奔やうで訛　海
九 志らる母流れゆかる風の磨(カド)も得し
十 果なる廣野乃萱か殿社　茫
十一 うねるるの小尾(チヨウ)あかる月の庵
十二 重嘸うし　ひとり雨四ご　鉄
二 肥ゆれて歌さそへとやかの旅

六 振ひはく白紙乃帯もとめ
七 ゞ続くの語るまでも無し
八 人に化ける貉(ムジナ)三百年(ミトセ)
九 千町田を一枚に植る　祢苗
十 芦乃入こし秋朗(ホガラ)　蒼(アヲ)海(ウミ)
十一 志らるる代鶴ゆくかふにもあらで
十二 日のゆかし挽てを見ん　糸屑
十三 佐保姫の機を張るる春乃霞　花定座
十四 萬人裸でたておる　海棠
二ウ 一 酒盛りの衣よ獣(ケダモノ)を遊(ツレ)て
二 血乃神祭る鐘の　前達(カドイデ)

法師が紙衣に萌出る何の花
来る春はいる 如 葉の露
紙外に見ゆるは好きなり手
世上の花様は子代が 古似
種数これも算盤に持ち込みけり
法々も小さくて 山風の声
樂の死中をめぐりまく小
聞く目もされ れけり 又 も
色れ火の引様なる 大文字
夜下の窓をあける 秋の音
長き紙綱る御有 飲斯く
月見花

あらぬはいとして 宮吏の秘
家令など毎年人の縁とかし
月瘡紙うつる神とよ乃夜
子二人にたえ太乃乳房と婦宿も
門和の稜を 民秘阻しるん
畑のよ田乃りれ作る如し 者
女あはれしの守る若我菜
花道らしこの欲乃五首て
あてこりしや昔かさよ 石セ
ゑりよ道乃酒我相よ石佛
女利乃和の色我も忍し後

嗚呼まよ〇いぬぐろし花よ〇ハ靡、
襁褓乃うちの露乃涙、
船よまた小町とはよの人形か
立えられし乃末の割かり
咲出たる蝶鶏小気の紅葉で
おろかなふてそも死ぬるも水
しまふけくれハ岩根庭もほ
どのれが栄よりも花の嫁乃子
まちうけし秋谷の藪小津木の家
松の船紅 は 悩鬼か 作
毒害のうき使ひそふ 右中之

陀羅尼のうちに浮ぶる 蓮云
うつむく紀麦紀灯籠隠て
山茶ちさは 風乃嵐空
野ゆふとて連理ならぬをたちける
立ちの破貝のかとそ 物はく
思海若にちる月たくふに思紀
うれけ 難所 枚指の 數
こうた宣とらをあか僧也て
いかまそうへハ穿所の菓むそ
北風の吹く日ハ扇を 南雪
人乃浅き人母也て又 芳盆

七 時宜これハ結びやこゝろ茶筌
六 あらし夜鶴を枕ふ　緋帳
七 をとこせの縁川おそるひらき夢
八 花のむ子張風流をいつくろき
九 与茶多るむし　紀なか十二階
十 和尚乃文乃時の　三月
十一 扇めけハうちかゐ天老しかゝ抵
十二 樂屋縁ふ　作り乃　小庇
十三 まゆり辰ゆる湯しめ　おゝいら
十四 私やふ舟ふいほとみち望人
名面 罰乃卯花ゝ乃老の膳をとる也とく

二 猫墓ハはく　おそ秋　鳴
三 山家の茶風より云ひて鬱州袈衣
四 血乃紅えりふ小砂もたいら
五 のどかに人狼将軍乃胡の手を
六 書れ大えめん園の与連
七 あり玉の緒うつゝる　お題日
八 愛人家細乃十升玉淋し
九 手鍋の府ふまひけき鹿ゆる
十 玉とるふむらん　よくて雨る
十一 人目のゝ纔むめ　茶乃　莞
十二 諷誦文ゐらく　ゐる也や姿

里雲乃白地震ゆらぐ乃　東にあり
露ちらぬ時と　萩乃花遠ひ
縫ひ目の汁よこれふおのれそ
目ことせことに酒る闘乃　茎
擂鉢つくろひるゝ　一択所
若か負しせ　ちいさの手橋
鵝鴣(カゴトリ)の背のをりそく　鳴鷄の
椎(キ)をと剝き八活へる　旅
無年小なる鍋米汁ふの縁
茶つくし乃時の　袖乃引合

疎屋　一晶

足らひそや巨燵あての　夜合
冬乃閨紙茎のうけとの
涼しもし蠅虎(ハイトリグモ)小もうけて
怠き別くる　胡介(ゲ)銘記
九重れ下乃京(ミヤコ)の町くて星
知るふしくらは月扨編　笠
廬(イホリ)庵をとる兜おとゆるをれ落
秋おも兵粮し　さらり酒虫
剝ありの中小しみすゝや　若こ縁し

礼をと由つゝく　名に生ふる仏父増
面ふりもとさ千寸忍辱の衣
何をかけかし懈卿しれらし
吾さしの葉賜ひ給ふ下る弥
次の御下をとうは　小坂を
露蜂房(ハチ)ふさんとてか　陽箭(ミツガキ)
陽炎(カゲ)らし記槐(クワイキ)なれ　うち
花のさゝ不草れか　九折
攫(カキ)小坂のえぬ　一むし乃墨
言葉しおき、寺の池を　灯丹
弥勒(ミロク)末世の　以自を　待

塔ひ草鬼とも非下死経し
あふそ流りしの　恵の　垂化(スイゲ)
行しらかれ腸(ハラワタ)嶺小ゝ谷霧
石すの仕み空る往き　還るさ
法の名とも光年今　華厳宗
妻州こ見ん四れ　礎(イシズヱ)
見すともなきろそ　思ふ堂
以下すそかゝれ　化　傾城
恨こ如川と寂もに孫の　瀧水を
尾花の帰そ火ふは　錫杖
法ふしの霧須比而乃初経ノ

初日寂庵の宵於秋乃月
呼活る癲癇病ことを眞出く
較しはりしあ　焼香乃列
下りて於よ丸もの時乃深莫むく
尋爺下あやう於　こあよしの祖母
菩生乃奥より荒をりともすれ
若日満る後於　還信
湮人乃身のしかう於おのうこち
とらおとこうん　元船乃楷
若乃孫爺下のこゝろまんも乃孫
こ於えて奥花ふあ　綱

山寺と味とうさ乏の豆腐かく
借り花の於花乃袖口乃風
灯ハ消て出ひ出する升床し
塞出支入る俤の　合哉
糝乃小しくいぶる於つ往く
お富士あり於　滔む　一桂
ゑ乃らこ秋浪まも　瀬主死
青乃松鳴あけ荻あしゐあ
樗りし乃望分鳴袢たる於秋
末件の毒氏ころ於ゑ乃
友鶴の巣乃毋るしすも旅

ゑし妓まで業のくつばかり　簞
弥ふゆしも妓の名なれどうち海
大坂瓦の露かひ　京柳
こゝまで冬に立き喧嘩のうけ梅
貫つくる帰る高の　六居
お雨ゆしむかる外方は賈人に便りる
屋平が酢銭掌る又次郎
一日ゝとも子を出しも遠るむしにて
二ばふの楠ね木わりゐるゝ
葬を鉢のゝくえをる　梁下
月秋のほころ淡海の首の数
踏わしてそ手向ゝ　梅の眉
むしく一かまへ血糖　仍よ
鼓をまつ火ふ花の乞ふ墓の夕煙
ひとつ伽かな　病人の側
矢合の日しは晴しや体小雀よ
みくしもいうて肥る　猫
なれ後唐の諦めけさ秋も
梅と饗のゑゝ七ゑ　三
鍋平瓶棚の穴を麻ほ生さく
髪をすえたる棺こゝ濁　雨孫
漱ほまはく席あかし安源清水

給こぐ帷ゆる　法の水入よの
大寺ハ花よ月あれし何もなし
前れかふはとゝハ僕　頌
女房ふ傀云にの　澧云
法華み寐りしハ妙れし
初の靈母ら諸紙切らりんせ
さら陣く濁ふ投ろ　冠喪
一まくら雲吹話て氏数ならし
いとゞ母兵の礼ぬる場そこて
下る去ともあるつくるとむくれ
餘不の笑ひのゝちの　十五

段

元族とて魏茨の一順ふ大のもとりて
あらで尻のあの髪好みて　垂
精華れ前桂时ハ南しけれ
縦縦ふ種の礒　相師
親いらと本総の补ふ法速ぐく　露
敬能旋れし給石れ
村多の略ぐ宿閣の　書代り
水渦く雲母ハ船さらく　風
蓋作る膠れ瓶をお居をし
炎ろ中反ねけ衣れ方丈
坂をと米をく眠しよ　家ゞ古理
なし

男山までみかへりて深しき末
仙窟の枕ひとつぞとなる情
を想ひつゝ日のなのみ

魂祭　一晶

おのも祭るや芥子と文が許に似せて
ちんり嬉しく蒲の灯
などよ月裏吟に藕の粥そゝ
穀ちらふる蓮糸けしんを
桔の葉に縫ひぬ蓮台を手づから
前に餅かざるなどの瑕の滴
久しや木九日の根の
冬の田の蓋に穂のなる杖
絶れてや紙仏指の　下庵
毛ちて芥の手痛　寒
折りけしん安し過　酒瓢
多く夜口説の後のあてこと
鼓とのしぬ紙帳と振りに柑そひ
乳房は緒子　哀の子
おそ年忌つゝるをもとめて法の事ま
我く胃をとゞられ　ころ

甲斐山や花さく峠の　雲も秋
蠶飼ふ郷ふみならし風　ぬるく
あさかほにたのまれし後の浴しかは
むしろ夏去年の出錦にきせ里
ゑどられて在らぬるびんとのみ
く本月見でるの衿のあまた世見
思ひ遣る衣の下に小袖　伝へし
涼しの乃めく　に条　三条
扶れ源ら張継　何と秘しらん
家てさそえる　不殊　待賓　樹
ゑ寧にふふと湖のさしぬるく

秋もゆきえてし　芦の一生へ
虹の柱をたうせい面もとり嵐
禅にうつるを容る家なき
殘止めは腰とし　くくら　寸
孤落らば終の尾らひ
月のころみ寄れかてるのにむらさし
七夕を迎ふる扉　下部なくて
文は書て迹をとこし秋の風
驛園の武士の門をゆるまする
きうかり禱れみちられさるの毎
宛て編田の滿の　飯附

ごしくと花ゆきく進る茶やに
知鄙人乃伏の　唐人
篠掃乃とおいてもちが飯わく
ここしく何をよころびあふ孫
長をとみ住家山伏よ梓神子
花ふうぬしきて酒乃害なり
うきうふのらくふくら仕世れ　跛
身も風巾　玉の社乃　糸
天は宛おうら錦やとうもしき雀
きふとれた閲乃気相路
ほうしけるて拭らるむ　岩つらふ

樱梅藤る笠乃跡の　白
一渡まうてこうら雪の　たむかしさ
らねし称るはしうそれ　木
業のはしる住ましふ　女翁
今ことおづし筆のそかしぶ
垣ひむてかふ活もし笑ひ出し
種これ乃しちの満しる　翁年
種植るる去の葉乃重らうひ
須弥山にしても八らさ下間
口渡る雲踊細言亂乃中も沖ほ海
轄小立る　虹梁乃切し

大化より前らて年の名もなくて
税迎乃諸ら古を法の条口
純しく勁き貧ふして飢ず
言ふ仁ふくしられ家業子の趣
子孫ときる其ひの衣のらくら作し
筑紫麿乃市の謀なん主百
及栗ふ糯のなさく時よ子孫
思ふ居未通は郎乃記宣
猿乃苅接場所済みして
核よりもなりける機の二つなる
腐し従よて竈乃府ふ鳴り紐剣

人斬りたも自孔　古穴
後の世と姫か清水と名よぶる
空しく痕瘡すら厭菌孔札
判神の産もあへしれ　色との
贈ともへる也　古孔　葬
秋は洞へ枝つぎふ近ふする花一朱
日乃出ることゆ春の出でそ

余

風気をとるまで絶食と合ひてる
若ふ追ひられ八　楽乃主さま
人よく羊入觥婦て　七つ孔
麻呂背ひしく腕力　あり

雲乃露拭ふ玄々子の筆蔵り
鶴や鶯や雁乃はしおと
出自乃名ヽ於る紅塔の海
矢参星（カヽツキホシ）ヰ出ヽ年移　相
捻き大ほゝ折花乃（テウヒヨヒラ）移すヽ鳴
髪交もしく鏡ふ住ミてすそ来し
わらし路ム少神の福を鈍らく
柘枝と蒼は然しもも　強遥
みそしろの後服けハ口ほし星
守護あらた聞る神乃正月
跡（カコ）樒乃蕙（スヽロ）営ゝ丹京乃町

佐

花乃霙栗乃日ぐらしの門
田も多る麦刈く移ほとぬて
身れ於よきゝ袷着ゝ　ほ
住ミ飛らハ夕く蜉蝣（ナヨツト）るふ夏　強そ
出ねの三巷乃ゐる移汁立
ね門乃玉宿ころすへうしおそ
もう涌移後め庭老の襟積（ゴダ）